

平成十九年度 大学院研修旅行（万葉旅行）報告

伊 藤 好 美

一三〇〇年の時を超え、語り継がれる歌がある。

一三〇〇年の時を超え、護り続けられる聖地がある。

現存する我が国最古の歌集である『万葉集』は、奈良時代の中期に編纂されたと言われている。それから一三〇〇年あまりの時を経ているにもかかわらず、万葉集に収録された歌々は今なお輝きを放ち続け、万葉人が尊んだ地は今も変わらずその姿をとどめている。

果てしない時を超えて人々の心を掴んで離さない万葉の歌々。万葉集に縁ある地を踏むことで、歌に込められた万葉人の想いを肌で感じてみたい。—そんな、私たち大学院生の願いにより、本年度の大学院研修旅行の目的地は、鳥羽・伊勢・熱田に決定した。

池田三枝子先生のご指導のもと、研修旅行は平成二〇年三月一〇日から一二日にかけて二泊三日のスケジュールで実施された。大学院生三名の他に、池田先生の授業を通じて、学部生一五名と科目等履修生一名が集まり、参加者一八名の旅行となった。

一日目 三月一〇日

この旅の集合場所である名古屋駅で顔を揃えた参加者全員は、近鉄特急で一時間半ほどを要する鳥羽を目指した。研修旅行初日の見どころは鳥羽湾である。

伊勢国に幸せる時に、京に留まれる柿本朝臣人麻呂が作る歌

釧路つく 答志の崎に 今日もかも 大宮人の 玉藻

刈るらむ

〔万葉集〕卷一・四一番歌

右の歌は万葉第二期の著名な歌人である柿本人麻呂の作で、歌中に登場する「答志」とは、鳥羽湾最大の島・答志島を指す。この歌は、『日本書紀』にも詳細な記録が残る持統六年（六九二）の三月に行われた伊勢行幸のときに都に留まった人麻呂が詠んだ歌で、玉藻を刈る海人の手業を女官たちが戯れに真似るさまを想像しての作歌である。都に暮らす宮廷人たちにとって、答志島で行われる藻刈りの風景を眺めることは旅の趣のひとつであった。鳥羽は万葉人たちが羽を伸ばしたりゾート地であったともいうことができる。

近鉄鳥羽駅から鳥羽港に到着した私たちは、小型の遊覧船をチャーターし、鳥羽湾巡りへと繰り出した。港を出た船の後を追ってくるカモメの群を見て、万葉の宮廷人たちも海鳥を見てはしゃいだのかも知れないと心が踊った。鳥羽湾には人麻呂が詠んだ答志島のほかに神島やイルカ島など多数の島が浮かんでいる。風光明媚なこの地は、万葉の時代から現在に至るまで多くの文学作品の舞台となってきた。有名なところでは、三島由紀夫の『潮騒』や山本周五郎の『扇野』等をあげることができる。その他、西行や松尾芭蕉らが鳥羽の地を詠んだ和歌や俳諧を残している。

作家や歌人たちの心を捉えた風景に身を委ね、文学の世界に思いを馳せることができたのも、現地を訪れたからこそ醍醐味であった。

およそ三十分の鳥羽湾巡りを終え、遊覧船はミキモト真珠島に到着した。この島は、ミキモトの創業者・御木本幸吉氏が一八九三年に世界で初めての真珠の養殖に成功した縁の地である。

海神の 持てる白玉 見まく欲り 千たびぞ告りし
潜きする海人

〔万葉集〕卷七・一三〇二番歌

万葉の時代、真珠は白玉と呼ばれていた。美しい白玉を手に入れるため、海人が海に潜っていたことが右の歌から読み取れる。人が海に潜って貝を捕る技術は現在でも残っており、ミキモト真珠島ではその技術の実演を見ることができるのである。真珠島内にある真珠博物館によると、現在は養殖技術の進歩により海女の必要性はなくなったが、海女の活躍を記念するために真珠島では海女の実演を行っているのだという。昔ながらの白い磯着を身に付けた海女が見られるのは、真珠島だけのことである。

私たちは「海女スタンド」なる観客席で海女の実演を見学することとした。船に乗って登場した三人の海女さんたちが思い切りよく海に飛び込むと、観客席からは歓声が上

がる。観客の前に再び姿を現した彼女たちが、にこやかにアコヤ貝を掲げると、大きな拍手が湧き起こった。海女さんたちは水面に浮かべた桶に貝を入れ、休む間もなく再び海中へと姿を消す。この技を三―四回披露し、およそ十五分程の実演は終了した。晴れ渡った空の下、海女さんの真つ白な磯着が青い海の煌めきに映え、大変美しい光景であった。

その後は各自自由に真珠島内を散策することになった。私は真珠博物館を訪れ、輝く真珠を惜しげもなく使用した美術工芸品を前に溜息を漏らし、御木本記念館で真珠の養殖に懸ける御木本氏の並々ならぬ熱意を知った。現在、私たちが手にすることのできる真珠の大半は、氏の努力の結晶ともいえる養殖真珠である。もしも養殖技術が開発されていなければ、真珠は今も万葉時代の「白玉」のままだったかも知れない。

各々、島内の散策を楽しんだ私たちは再び集合し、徒歩で鳥羽水族館へと向かう。一九五五年に開館した鳥羽水族館は、通算五千万人という全国最多入館者数を誇る大規模水族館である。「人魚のモデル」とも言われるジュゴンは館の顔ともいえる存在で、世界の飼育記録を更新中だという。私たちは暫し研修であることを忘れ、アザラシの餌付けや海獣ショーを童心に還って楽しんだ。

鳥羽を満喫し、宿に着いた私たちが夕食後に挑むのは、万葉旅行恒例「万葉百人一首大会」である。要領は小倉百人一首と同様であるが、歌は万葉集から選ばれた百首で、この旅に関係の深い歌も多数含まれている。皆で大いに楽しんで和やかに会は終わり、二日目が無事に終了した。

二日目 三月一日

二日目は、この旅の主要な目的地となる伊勢神宮を目指す。

大津皇子の薨せし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らす歌

神風の 伊勢の国にも あらましを なにしか来けむ
君もあらなくに

〔万葉集〕巻二・一六三番歌

右の歌は、万葉第二期の女性歌人・大伯皇女が、弟である大津皇子に捧げた挽歌である。大伯皇女は、皇祖神・天照大神を伊勢神宮に祭る「斎宮（斎王）」として、十二年の歳月を伊勢で過ごした。斎宮は「天皇の御杖代」とも称され、天皇の許可なく斎宮のもとを訪れた大津皇子は、反逆罪に問われて刑死させられたのである。「大津皇子謀反事件」のほかにも、『古事記』における「倭建伝承」や「速総別伝承」など、上代文学には伊勢神宮と深い関わり

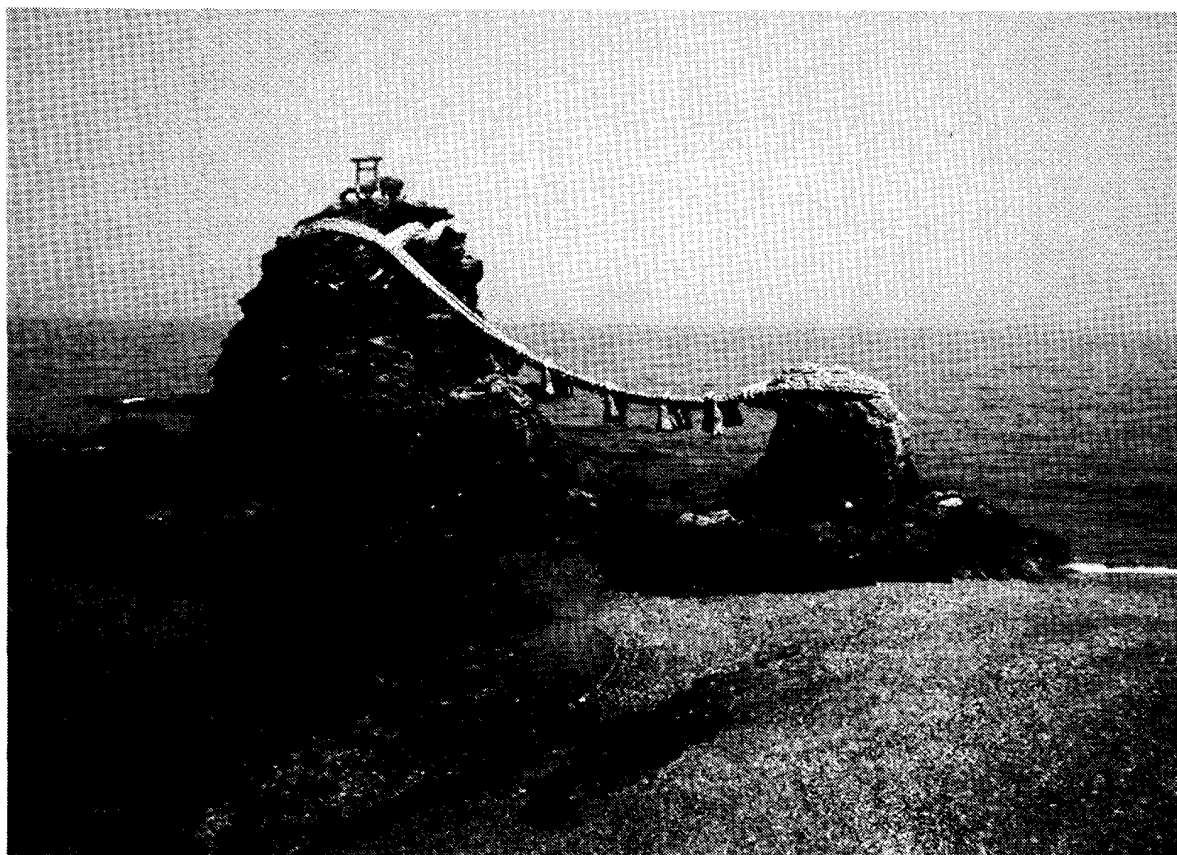
を持つ作品が見られる。それは、古代人にとって伊勢神宮の神威がいかに大きなものであったかを示しているともいえるのである。

マイクロバスに乗り込み宿を出発した私たちは、伊勢への道すがら、鳥羽展望台に降り立った。遮るもののない中、眼下に広がる太平洋を一望すると、古代の海を眺めているかのような錯覚にとらわれる。遙かな時を超え、万葉人と同じ景色を目にしているであろうことに胸が高鳴った。雄大な自然を楽しんだ鳥羽展望台から次に目指すのは二見浦である。

古来、伊勢神宮に詣でる者は参拝に先立って二見浦で禊を行うのが慣わしであった。私たちも古式に則り、二見興魂神社から伊勢神宮への道程を辿ることとした。二見興魂神社は、日の出遙拝所として名高い「夫婦岩」で知られる神社である。この二つの岩は沖合約六六〇メートルの海中に鎮まる霊石「興魂神石」を拝する鳥居と見なされ、常世の国から神が寄りつく聖なる場所とされてきた。大きい男岩は高さ九メートル、周囲三九・九メートルで、女岩は高さ四メートル、周囲九メートルである。両岩の間は九メートルあり大注連縄で結ばれている。

夫婦岩が鳥居の役目を果たす「興魂神石」に縁があるとされるのが猿田彦大神である。この神は記紀の天孫降臨神

夫 婦 岩



話において、天孫ニギノミコトの降臨に際し、天の八衢に迎え出で、途中の邪悪を祓いながら先導をなした神とされている。このことから、善に導く神として、開運招福、家内安全、交通安全の守護神として信仰されてきた。また、魂を導き蘇らせる神威があるともされたことから、「興魂の神」とも讃えられているのである。猿田彦大神にこの旅の安全と充実を祈願した私たちは、一路、伊勢神宮へと向かった。

伊勢神宮は、現在では一般に「伊勢神宮」や「お伊勢さま」と呼ばれて親しまれているが、正式名称である宮号は「神宮」である。神宮は、「内宮」と呼ばれる皇大神宮と「外宮」と呼ばれる豊受大神宮に分かれている。内宮は五十鈴川のほとりの宇治の地にあつて、皇祖神であり太陽の女神とされる天照大神を祭り、外宮は宮川のほとりの山田原の地で、食物を司る女神である豊受大神を祭っている。この両宮を「正宮」として、それぞれに別宮や末社などの多数の宮社が所属し、その数は百二十を超える。「神宮」は「内宮」と「外宮」の総称であるが、正宮から末社までの宮社を総称する場合にも「神宮」という。私たちがまず向かったのは内宮である。

古代の伊勢神宮の性格は「天皇の守護神」という一語に尽きるもので、民衆の信仰とは隔絶したものであった。し

五十鈴川の清流



かし中世以降、朝廷の保護が途絶えことで伊勢参宮が庶民の間に広まった。殊に近世後期になると、女性や子供までもが「おかげ参り」と称し、大挙して参宮する風潮が起り、時としてその人数は数万・数十万人にも及んだと伝えられる。

鳥居の向こうに伸びる宇治橋は、五十鈴川に架けられた全長百メートルを超える木造の橋である。御神体を祭る正宮に至るまでは、この宇治橋鳥居を含め三つの鳥居をくぐることになる。宇治橋鳥居から少し歩き「一の鳥居」をくぐると御手洗場がある。五十鈴川の清流で手を洗い心身を清めたくて「二の鳥居」をくぐり、正宮を目指す。太古からの姿をとどめる杉の巨木が聳え立つ参道を玉砂利を踏みしめながら歩くと、一步を踏み出すごとに古代の信仰に近づいていくような厳肅な気持ち湧いてくる。清澄な空気の中、やがて正宮へと続く石段へと辿り着いた。

正宮に祭られているのは、内宮の主祭神・天照大神である。「日本書紀」の記述に「光華明彩しくして、六合の内々に照り徹る」と称えられるその御神体は「八咫鏡」で、これに八坂瓊勾玉と草薙剣を加えて三種の神器と呼ばれる。正宮は四重の垣根に囲まれているため、参拝者は近づくことはおろか、その社殿を見ることすらできない。賽銭箱の後方には白い布が垂れ下がり、その奥にあるであろう正宮

へ向けられる視線を遮っている。目にするこのできない社殿を思い手を合わせたそのとき、心地よい風が吹き抜け、一瞬翻った白い布の隙間から、その奥の社殿が垣間見えた。思わず、「伊勢」の枕詞が「神風の」であることが頭に浮かんだ。

正宮の参拝後も内宮参拝は続く。内宮には主祭神・天照大神を祭る正宮のほか、風の神を祭る「風日祈宮」や、天照大神の荒御魂を祭る「荒祭宮」といった別宮が点在する。別宮に詣るため、広大かつ高低差の激しい内宮の敷地内を私たちは勇んで歩き回った。荒祭宮を拝して長い石段を下り終えたとき、ふと見ると、杖を片手にした老婦人が石段の麓から荒祭宮を遙拝していた。上方を遙かに見やり静かに手を合わせる姿の清らかさに、私は息を呑んだ。真に信仰する人の姿を目の当たりにした私は、ここが古代から変わらぬ聖地であることを思い知り、そこに立つことのできた尊さを噛みしめた。

およそ一時間を要した内宮参拝を終え、マイクロボスは「神宮徴古館・農業館」へと向かった。神宮徴古館は神宮の祭典に係る資料や装束神宝、また、歴史や参宮についての史料を有し、国の重要文化財一点を含む、歴史・考古・美術工芸品など約一万三千点を収蔵展示している。ここで、内宮の正宮を二十分の一の縮尺で精巧に再現した

皇大神宮模型を目にし、立ち入ることのできなかった内宮の垣内を窺い知ることができた。徴古館に隣接する神宮農業館では、自給自足の伝統を守る神饌など農林水産関係の標本・資料を見ることを通じて、参拝だけでは知ることのできなかった神宮の精神文化を学ぶことができた。両館での見学を終えた私たちは、次なる目的地・伊勢外宮へと出発した。

外宮の祭神は、食物を司る女神・豊受大神である。この神は、天照大神のお食事を調える「神饌都神」として迎えられた。その鎮座について延暦の『止由気宮儀式帳』には、雄略天皇の夢に現れた天照大神の神託により、丹波国から豊受大神を山田原の地に迎えて御饌殿を建てたと記されている。御饌殿とはいわば神の食堂であり、千五百年前の鎮座から現在に至るまで一日も欠かさず、神に捧げる食事が朝夕作られている。

外宮は内宮に比べると小規模であるが、清々しい空気は内宮に引けを取らない。私たちは外宮に詣で、最後には野鳥が羽を休める勾玉池を眺めて、神宮参拝を終えた。

外宮を後にし、宇治山田駅からは電車で一路名古屋を目指す。およそ一時間半の長い移動であるが、旅の話題に花が咲き一向に疲れない。宿に荷物を置き、今夜の懇親会場へと向かう。名古屋の名物料理に舌鼓を打ち、大満足のうち

ちに二日目の行程を終えた。

三日目 三月一二日

三日目の第一目的地は蓬左文庫である。「蓬左」とは江戸時代に使用された名古屋の別称であり、それは熱田に伝わる蓬萊伝説に由来する。

高市連黒人が羈旅の歌八首（第二首）

桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市潟 潮干にけらし 鶴鳴き渡る

（『万葉集』卷三・二七一番歌）

蓬萊とは中国の伝説に登場する霊山で、熱田こそが蓬萊であるという伝承が古くから伝わっていた。右にあげた歌にあるように、熱田は「年魚市潟」と称される自然に恵まれた場所であり鶴が飛び交う幻想的な土地であった。このことから、熱田が「蓬萊」に結びつけられるのも無理はないことといえる。名古屋は京都から見ると熱田の左にあたることから、蓬萊の左、「蓬左」と呼ばれたのである。

蓬左文庫の歴史は、元和二年（一六一六）、徳川家康の死去から始まる。家康の遺品の多くは、尾張・紀州・水戸の御三家に分譲された。のちに「駿河御譲本」と呼ばれる家康の蔵書について、現在、紀州・水戸両家では、ほとんど実態を確認することはできないが、蓬左文庫に残る尾張

家本は、その原型を最もよく伝えているといわれている。

蓬左文庫に所蔵されている江戸時代以来の尾張徳川家旧蔵書は、江戸期のものを中心に、一二世紀以降の中国・朝鮮の優れた書物や、日本の古典籍・古絵図、蘭書など、およそ六万五千点に及び、このうち、駿河御讓本を中心に七件一五四点が重要文化財の指定を受けている。明治維新後の蔵書も多く、現在の蔵書数は約一十一点にのぼり、蔵書内容の豊かさが蓬左文庫の特長のひとつとなっている。

隣接する徳川美術館では、雛人形の展示が催されていた。小さな道具類ひとつひとつの精巧な造りに目が釘付けとなり、瞬く間に時間が過ぎた。蓬左文庫・徳川美術館を出た私たちは、路線バスで白鳥古墳へと向かう。

白鳥古墳は五世紀末頃から六世紀前半頃に造られたとみられる前方後円墳で、能褒野の地で没した日本武尊の魂が白鳥となって舞い戻り、鎮座した御陵であると伝えられている。その傍には、東海地方最大の前方後円墳である断夫山古墳が存在する。こちらは、日本武尊の妃・宮酢媛の墓であると考えられている。宮酢媛が日本武尊との契りを違えず、夫を持つことを断ち貞節を守り続けたことに因み「断夫山」と名付けられたともいわれる。古墳群の見学を終えた私たちは、いよいよこの旅の最終目的地となる熱田神宮を目指した。

熱田神宮は伊勢神宮に次ぐ由緒ある大社とされ、三種の神器の一つである草薙剣を祭っている。熱田神宮の成立に關して、『尾張国熱田太神宮縁起』には断夫山古墳に葬られたとされる宮酢媛との関わりが伝えられる。これによると、宮酢媛は日本武尊から託された草薙剣を守っていたが、神劍の靈験があまりに著しかったため社地を定めて神劍を祭ることにした。社地とするに相応しい場所を求めて媛が訪れた地には楓の木が一株立っていたが、自然に火が出て水田に倒れたので、この地を熱田と命名し社地に定めたという。

街中に突如としてその姿を現す熱田神宮に到着した私たちは、参拝の前に神宮宝物館を訪れた。この宝物館には、刀剣・和鏡・舞楽面・古文書など約四千点が収蔵され、その中には国宝・重要文化財も多数含まれる。展示室では貴重な宝物が順次展示されているが、今回は重要文化財に指定されている『日本書紀』熱田本を閲覧することができた。宝物館を出ていよいよ社殿を拝する。神劍を祭ることから武神としても篤く信仰され、足利・織田・豊臣・徳川諸氏がいずれも崇拜した熱田神宮ではあるが、平和な今の世では心静かに手を合わせることができる。社殿の傍では穏やかな日差しの中で春の花が咲き誇り、ここが街中であることをすっかり忘れてしまうほどに静寂な時が流れていた。

これを以て、研修旅行の行程は滞りなく終了し、熱田神宮の最寄り駅である熱田駅にて解散の運びとなった。私たちは上代文学に縁の深い土地に立ち、古代から変わらぬ神聖性を肌で感じた。「歌が生まれた地を踏み、歌に込められた想いを感じたい」という願いは十分に叶えられ、この上なく有意義な研修旅行を満喫することができた。充実した行程をご考案くださり三日間に渡り私たち参加者を教え導いてくださった池田先生と、私たちを常にサポートしてくださった国文学科助手・上野加奈恵さんに感謝したい。この実り多き研修旅行で得られた知識は、必ずや今後の研究の糧となると確信している。